

高等学校

平成25年度

教育研究員研究報告書

国語

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の視点	2
III	研究の仮説	3
IV	研究の方法	3
V	研究の内容	5
VI	研究の成果	22
VII	今後の課題	23

研究主題	思考力・判断力・表現力等の「伸び」を生徒が実感し、次の学習活動に活用できる学習評価の在り方について
-------------	--

I 研究主題設定の理由

1 社会の現状

平成 25 年度に完全実施となった新しい高等学校学習指導要領の解説には「国語による表現と理解の能力及びそれを基盤とする伝え合う力は、人々の知的活動や創造力が最大の資源である我が国において、社会の変化に主体的に対応できる力を支える基礎的・基本的な能力として、今後一層必要性を増してくると考えられる。」とある。高等学校国語では、価値観の多様化、都市化、少子高齢化、国際化、情報化などの社会の変化に対応し、よりよい社会生活を送るために必要とされるコミュニケーションの基本となる言語能力を育成し、思考力や想像力を伸ばして心情を豊かにする国語の力の育成が求められている。

2 生徒の現状

新しい高等学校学習指導要領解説の「改訂の経緯」によると、「OECD（経済協力開発機構）の PISA 調査など各種の調査からは、我が国の児童生徒については、例えば、① 思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題に課題、② 読解力で成績分布の分散が拡大しており、その背景には家庭での学習時間などの学習意欲、学習習慣・生活習慣に課題、③ 自分への自信の欠如や自らの将来への不安、体力の低下といった課題、が見られる」としており、基礎的・基本的な知識・技能、思考力・判断力・表現力等及び学習意欲を重視した学習指導要領の改善の方向性が示された。

また、文部科学省が実施した中学校 3 学年対象の平成 25 年度全国学力・学習状況調査においても、基礎的・基本的な知識・技能を問う国語 A の正答率 76.8%に対し、基礎的・基本的な知識・技能の活用を問う国語 B の正答率は 68.0%と、やはり知識を活用する問題に課題があると指摘された。

研究員をはじめとして、実際に高校生に接している教員の実感として、高等学校においてもこれらの傾向はうなずけるものであり、生徒は知識の習得に重きを置きがちで、自ら考え表現することや、身に付けた知識を活用し、ものの見方や考え方を進んで広げようという意識や意欲が希薄であると感じられる。大学進学を目指す生徒の中には、受験で必要とされる知識の習得が目的となり、知識を活用し自らの心情を豊かにすることや主体的に社会に関わろうとする態度、人間関係を円滑にし、日常の言語生活を豊かにしようとする態度を軽視しがちの者が目に付く。学習に課題のある生徒には自信の欠如や自己への不安が顕著に表れ、思考力・判断力・表現力を身に付けることはもとより、基礎的・基本的な知識の習得においても意欲の低い傾向が見られる。こうした現状に対し、学習指導要領の改訂を受け、今後は言語活動の充実に向けた取組を更に積極的に行っていくことになるが、現時点では、生徒は「正解」を求めがちであり、思考力・判断力・表現力を用いた知識を活用する言語活動に対しては苦手意識が強く、活

動が活性化しにくいという状況を、研究員全員が経験的に共有している。

学習指導要領が生徒に求める基礎的、基本的な知識・技能、思考力・判断力・表現力等を伸長させるためには知識の習得はもちろん、主体的に学習に取り組む態度を向上させる必要がある。

3 主題設定の理由

新しい学習指導要領を踏まえた学習評価の基本的な考え方について、平成22年5月に文部科学省から出された「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）」では、「学習指導要領において示された基礎的・基本的な知識・技能、それらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等及び主体的に学習に取り組む態度の育成が確実に図られるよう、学習評価を通じて、学習指導の在り方を見直すことや個に応じた指導の充実を図ること、学校における教育活動を組織として改善すること等」や「保護者や児童生徒に対して、学習評価に関する仕組み等について事前に説明したり、評価結果の説明を充実したりするなどして学習評価に関する情報をより積極的に提供すること」が重要であるとしている。高等学校については従来、「各学校において生徒の特性、進路等に応じて多様な教育課程が編成されていることから、高等学校学習指導要領に示す各教科・科目の目標に基づき、学校が地域や生徒の実態に即して設定した当該教科・科目の目標や内容に照らし評価を行うこと」、「小・中学校と同様、評価の4観点に基づく観点別学習状況の評価を踏まえながら評定を行うこと」とされている。しかし、現状は知識の定着を問う定期考査や形式的なノート点検・ワークシートの添削等の「評定を出すための評価」とどまりがちであり、観点別学習状況の評価への取組は十分とは言いがたい。そこで目標に準拠した学習評価により観点別学習状況の評価を行うとともに、評価結果を適宜生徒に把握させることで、生徒の思考力・判断力・表現力の伸長に加え、主体的に学習に取り組む態度を育成するよう、研究主題を「思考力・判断力・表現力等の「伸び」を生徒が実感し、次の学習活動に活用できる学習評価の在り方について」とし、研究を進めることとした。

Ⅱ 研究の視点

1 評価指標を用いた言語活動の充実

思考力・判断力・表現力を伸ばすためには、基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を解決する言語活動の設定が欠かせない。本部会では生徒の「自ら考え表現することや、身に付けた知識を活用し、ものの見方や考え方を進んで広げようという意識や意欲が希薄である」という傾向を受け、「自分の考えをもつ」「他者との交流の中で考えを深める」ことに焦点をあて言語活動を設定する。また、単なる言語活動に終始することのないよう、評価の適切な時期・方法を探る。評価結果を授業者の次の指導に生かすだけでなく、言語活動の中で生徒へ評価指標を提示し、生徒自身が目当てをもって主体的に次の学習に取り組む態度の育成を試みる。

2 評価の効果的な活用

今年度の東京都教育研究員の高校部会テーマは「思考力・判断力・表現力等を育む学習活動

を活性化させる学習評価の在り方」である。高等学校における目標に準拠した評価は、学習指導要領に示す目標や内容に照らして学習の実現状況を捉えるものである。授業者は生徒の学習の実現状況を適切に評価し、その評価を指導に生かすことが重要となる。今回、評価指標の作成・提示により言語活動が活性化するだけでなく、生徒の自己評価、相互評価や授業者による学習評価の結果のフィードバックにより、生徒が自ら学習を振り返り、「伸び」や「課題」を発見し、次の学習活動へつながることが期待できる。授業者は評価結果から生徒の学習の実現状況を把握し、次の学習の目標設定、言語活動の設定を行うことで学習活動を継続的、効果的なものにすることができる。このように、評価結果を活用することにより学習が次の学習の改善へとつながる評価を「思考力・判断力・表現力等を育む学習活動を活性化させる学習評価」と定義し、実践を試みる。

Ⅲ 研究の仮説

「Ⅱ 研究の視点」に基づき、次のような仮説を設定した。

- ① 学習活動に応じた具体的な指標を作成して生徒に提示し、適切な時期に評価を行う指導を繰り返すことで、生徒は自ら考え、表現する力を身に付けるとともに、他者との交流活動を通して、自らの考えを一層豊かにすることができる。
- ② 評価の指標を示し、評価結果を効果的に活用することにより、生徒は思考力・判断力・表現力等の「伸び」を実感するとともに、自己の課題を把握し、次の学習目標を主体的に設定する態度を育成することができる。

Ⅳ 研究の方法

1 研究の方法

研究仮説の検証に向けて、授業の具体的な在り方に関する実践的研究を行う。

仮説を検証する具体的方策を立案するため、部員が各学校におけるこれまでの実践事例等を持ち寄り、月例会や合宿等での討議を活用して授業案を作成した。仮説検証に向けた授業案作成の観点は、以下の3点である。

- ① 学習活動に際して、事前に具体的な評価の指標を提示し、これを目当てとして生徒に自分の考えをもたせる授業を構成する。
- ② 自分の意見を他者に伝え合う交流活動を行い、生徒のものの見方・感じ方・考え方が豊かになるような言語活動の場面を設ける。
- ③ 授業者の学習評価のフィードバックや自己評価、生徒による振り返り学習から、生徒が自らの伸びと課題を把握できるようにする。

2 具体的方策

(1) 指導事項

事例1では、自己評価や相互評価を効果的に取り入れ、自ら考え、表現する力を身に付けさせるために、学習指導要領「国語総合」、「B 書くこと」の(1)指導事項「エ 優れた表現

に接してその条件を考えたり、書いた文章について自己評価や相互評価を行ったりして、自分の表現に役立てるとともに、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること。」を目標とし、単元の構成を工夫した。事例2では、学習指導要領「国語総合」、「C 読むこと」の(1)指導事項「エ 文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図を捉えたりすること。」を目標に構成した古典の授業において、自己の伸びと課題を把握させる学習活動を行うこととした。また事例3などを行い、類似の実践事例を積み上げた。

(2) 方法1 (評価指標の提示)

評価の指標を具体的な学習の目当てとして提示し、話すこと・聞くこと、書くこと、読むことの活動を通して自分の考えをもたせる機会を設定する。授業者が学習活動の過程において適切な時期に評価指標を提示することにより、生徒は学習の目当てを、よりよく理解して活動に見通しをもつことができ、具体的な学習作業への手掛かりを得られる。生徒が授業者から与えられる正解を待つのではなく、主体的に学習活動に取り組もうとする態度になるよう促す。

(3) 方法2 (生徒の交流活動)

生徒の交流活動等を通して、自分の考えと他者の考えを比較し、自分のものの見方・感じ方・考え方を豊かにする学習活動を展開する。具体的には、自分の意見を他者に伝え、他者の意見を聞くという交流活動を行い、生徒の考えが、より深く、より幅広いものとなるように指導する。

(4) 方法3 (学習の振り返り)

学習を振り返る活動によって、自分の考えや表現の変容を実感させるとともに、評価結果から自己の課題を把握する活動によって、次の学習目標を主体的に設定することができる。

学習を振り返る活動や授業者の評価を通じて、自分の力がどのように伸びたのかを実感させる。また、同時に、生徒が授業者の評価結果も参考にしながら、今回の学習活動で自分が十分に成し得なかったことや自分に不足している能力等を自覚し、自らの課題として意識化することで、今後の学習につなげることができるようにする。

(5) 教材

上記(2)、(3)、(4)の方法で検証授業を行うに当たって、教材については次のような観点で選定、提示することとした。生徒が自分の感想をもちやすく、他者との意見交流・相互評価等を通して自分の考えや感じ方を深化させることが期待できる教材として、文学的文章である「近代俳句」「奥の細道」「枕草子」を使用する。これらの教材を用いて、生徒が効果的に自己評価や振り返り活動をし、また適切な場面で授業者による評価指標を提示できるようにするため、授業の流れに合わせて評価指標をあらかじめ組み込んだ形でのワークシートを作成し授業を行うこととした。

V 研究の内容

1 研究構想

全体テーマ 『学習指導要領に対応した授業の在り方』

高校部会テーマ 『思考力・判断力・表現力等を育む学習活動を活性化させる学習評価の在り方』

思考力・判断力・表現力等を育む学習活動の現状

生徒は知識の習得に重きを置きがちであり、自ら考え表現することや、身に付けた知識を活用し、ものの見方や考え方を進んで広げようという意識や意欲が希薄である。このことから、知識を用いて考え、判断し、表現する学習活動が活発に行われていない現状となっている。

学習活動の取組に対する学習評価の現状

授業者は知識の定着を問う定期考査や、形式的なノート点検・ワークシート添削等の「評定を出すための評価」にとどまりがちである。そのため、観点別評価への取組が不十分であり、評価結果を学習活動に活用できていない状況である。

現状から見えてきた課題

生徒が身に付けた知識を用いて考え、判断し、表現する力を習得するために、授業者は学習指導の過程で適切な評価を行い、生徒とともに身に付けた力を確認し、次の課題解決に生かすことができるよう、学習評価を工夫する必要がある。

国語 部会主題

思考力・判断力・表現力等の「伸び」を生徒が実感し、次の学習活動に活用できる学習評価の在り方について

仮説

- ・ 学習活動に応じた具体的な指標を作成、提示し、適切な時期に評価を行うことで、生徒は自ら考え、表現する力を身に付けるとともに、他者との交流を通して自らの考えを一層豊かにすることができる。
- ・ 評価の指標を示し、評価結果を効果的に活用することにより、生徒は思考力・判断力・表現力等の「伸び」を実感するとともに、自己の課題を把握し次の学習目標を主体的に設定することができる。

具体的方策

- ・ 評価の指標を具体的な学習の目当てとして提示し、話すこと・聞くこと、書くこと、読むこととの活動を通して自分の考えをもたせる機会を設定する。
- ・ 生徒の交流活動等を通して、自分の考えと他者の考えを比較し、ものの見方・感じ方・考え方を豊かにする学習活動を展開する。
- ・ 自ら学習を振り返る活動によって、自分の考えや表現の変容を実感させるとともに、評価結果を基に自己の課題を把握し、次の学習目標を主体的に設定する姿勢を育成する。

評価・検証

- ① 生徒が自らの考えをもつようになったか
 - ② 生徒が思考力・判断力・表現力等の「伸び」を実感できたか
 - ③ 評価結果が次の学習につながり、授業が活性化しているか
- について、アンケートや生徒の様子・発言・ワークシートの記述を通して、変容を検証する。

2 実践事例

設定した仮説を検証するため検証授業を行い、実践事例として示した。1時間の授業で全ての具体的方策の効果を確認するのは難しいため、振り返りと検討を行いながら3度の検証授業を行った。

実践事例1では、「国語総合（現代文）」の授業を行い、実践事例2、3では、「国語総合（古典）」の授業を行うことで、現代文と古典のいずれでも仮説が立証できることを期待した。いずれの授業も、学校や生徒の現状に合わせた評価指標を作成し、活用した実践である。なお、実践事例2、3については、ここでは、授業の中心の活動部分を紹介する。

（1） 実践事例1

教科名	国語	科目名	国語総合（現代文）	年次	1年次～4年次
-----	----	-----	-----------	----	---------

1 単元（題材）名、使用教材

- ア 単元名 俳句を鑑賞しよう
- イ 使用教材 たんぽぽ（俳句十句）

2 単元（題材）の指導目標

- ・ 優れた表現に接してその条件を考えたり、書いた文章について自己評価や相互評価を行ったりして、自分の表現に役立てるとともに、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにしようとする態度を育成する。（関心・意欲・態度）
- ・ 優れた表現に接してその条件を考えたり、書いた文章について自己評価や相互評価を行ったりして、自分の表現に役立てるとともに、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにさせる。（書く能力 B（1）エ）
- ・ 俳句に書かれた人物、情景、心情などを、表現に即して読み味わわせる。（読む能力C（1）ウ）
- ・ 俳句の表現の特色及び言葉の意味を理解させる。（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項 （1）イ（ア））

3 単元の評価規準

ア 関心・意欲・態度	ウ 書く能力	エ 読む能力	オ 知識・理解
話合いや相互評価を通して自らの表現をよりよくしようとしている。 俳句の形態に留意し、内容を読み取り、人物、情景、心情などを読み味わおうとしている。	話合いや相互評価を通して自らの表現をよりよくしている。	俳句の形態に留意し、内容を読み取り、人物、情景、心情などを読み味わっている。	俳句の表現の特色や言葉の意味について理解している。

4 単元（題材）の指導と評価の計画（5時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点				評価規準 (評価方法など)
		関	書	読	知	
第一次	<ul style="list-style-type: none"> 俳句の表現の特質を理解し、詠まれている心情、情景を把握する。 			●	●	<ul style="list-style-type: none"> 俳句の表現を基に、内容を理解することができる。 エ〔発言、観察〕 俳句の表現の特質を理解している。 オ〔ノート 記述の考察〕
	<ul style="list-style-type: none"> 俳句を1句選び、想像した情景を絵に表す。 		●	●		<ul style="list-style-type: none"> 俳句の言葉を基に情景を想像し、表すことができる。 ウエ〔プリント 記述の考察〕
第二次 (本時)	<ul style="list-style-type: none"> 前時に描いた絵について、なぜそう描いたのかを分析し、同じ句について描いた生徒に説明する。 	●	●	●		<ul style="list-style-type: none"> 自分の絵を言葉に表現することができる。そう描いた表現上の理由を、根拠を示して説明している。ウエ〔プリント 記述の考察〕
	<ul style="list-style-type: none"> 相違点を挙げて意見交換を行い、再度自分の考えを振り返り再考する。 	●	●	●		<ul style="list-style-type: none"> 自他の考えを比較して自分の考えに反映させている。ウエ〔プリント 記述の考察〕
第三次	<ul style="list-style-type: none"> 鑑賞文（下書き）を書く。 自己評価・相互評価する。 	●	●	●		<ul style="list-style-type: none"> 各自が書いた文章について、自己評価及び相互評価を行い、自分の表現に役立てている。 自分の書いた文章の構成や展開を見直している。
	<ul style="list-style-type: none"> 鑑賞文（清書）を書く。 	●	●	●		<ul style="list-style-type: none"> 表現の仕方について、評価を通して得たことを生かし、自分の考えを効果的に伝える文章にしている。 ウエ〔作文 記述の考察〕

5 本時

(1) 本時の目標

- 自分の考えを理由を示して説明し、自他の考えを比較して、自分の考えに反映させる。
- 俳句の表現から情景や心情を想像し、交流活動を通じて読み味わっている。

(2) 本時の展開

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法 (ア～エ)
導入	3分	<ul style="list-style-type: none"> 前時に描いた絵を見返す。 本時の学習活動を把握する。 	<ul style="list-style-type: none"> 俳句を音読し、前時に自分の感じたことを把握させる。 本時の学習活動を提示し、本時の学習の見通しをもたせる。 	

展開 1	1	プリントAに、前時の絵を説明する言葉と、その理由を俳句の表現を使って書く。	<ul style="list-style-type: none"> 言葉の意味、季語、切れ字の効果に着目させ、当初いだいた印象の理由を考えさせる。 	
	2	同じ俳句を選んだ者同士で班を作り、自分の考えを他者と話し合っって交流する。	<ul style="list-style-type: none"> 交流活動の手順と評価指標を示したプリントBを示し、活動の見通しをもたせる。 	
展開 2	①	それぞれの絵を見せながら、想像した情景を説明する。	<ul style="list-style-type: none"> プリントAの書き込みを基に、想像した物語や情景とそう考えた理由を話すよう促す。 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシート、観察 (アウエ)
	<p>①についての評価指標と授業者の対応</p> <p>A 交流の際に、思い描いた情景を自身の言葉でまとめ、理由を経験や言葉の意味の分析から説明できる。</p> <p>B 思い描いた情景について、ワークシートを基に話し、俳句の表現から理由を説明することができる。→より具体的になるよう、表現について問う。</p> <p>C プリントを基に話すことができない。自分の考えが言葉にならない、また考えの理由が分からない。→ゆっくり、プリントを順に話すよう促す。「なぜなら」などの話し出しを教える。</p>			
	②	お互いの絵の同じところや違うところを見付け、考えた理由などを話し合う。		<ul style="list-style-type: none"> 発言、観察 (アウエ)
展開 3	<p>②についての評価指標と授業者の対応</p> <p>A：相違点を見付け、その理由を自分の言葉で説明できる。また、皆の話を整理して話し合いを深めたり、軌道修正したりすることができる。</p> <p>B：相違点に気付き、自分の考えの理由を答えることができる。話す内容を理解し、質問や共感を示すことができる。</p> <p>→言葉の解釈は適切か、どの点に共感するのかなどを問い、話し合いを発展させる。</p> <p>C：相違点を話し合うことができない。自分の考えの理由が分からない。</p> <p>→焦らず、「同じ」「違う」を見付けて伝えるよう促す。「こう思った」までの流れを思い出させる。</p>			
	③	話し合った結果を基に自分の考えを見直し、プリントAに追記する。		<ul style="list-style-type: none"> ワークシート、観察 (ウエ)
まとめ	<p>③についての評価指標と授業者の対応</p> <p>A：交流を通じて自分の考えを見直し、矛盾のない豊かな読みができる。</p> <p>B：交流の内容を生かして、自分の考えを見直している。</p> <p>→「なぜそうしたか」を問い、そう判断する理由を自覚させる。</p> <p>C：交流が自分の考えを見直すことに生かされない。</p> <p>→始めの自分の考えを見直させ、同じところや影響を受けたところを問うて思考を促す。</p>			
	20分	3	プリントAを見直し、次の学習への見通しをもつ。	<ul style="list-style-type: none"> プリントAを見直すことで自分の考えの変化の過程を振り返るよう促す。 言葉に基づいた感想が鑑賞文につながることを示して、次回の予告をする。

〈プリントA〉生徒が「考えをもつ」発問のワークシート

俳句プリント②
俳句を鑑賞しよう () (部) () (年) ()

前回、俳句を選んでその絵をかきました。次はその絵について、説明します。「なぜそう書いたのか」も話します。俳句のどのことばから、響きから、自分はどう書いたのかを振り返り、次の表を書きましょう。(絵に描けなかったものも入れていいですよ)

項目	(書え)	(理由)	(《交流後の追加や気づき》)
①この絵は、いつ(何月何日)の、どこ(何処)の、どの風景ですか? 何で表しましたか?	秋 夕方が傾いて いろ	柿から秋と 秋の鐘が鳴るから 夕方を	柿の色と夕暮の空の色が同じ 交流の後に書きます
②この絵は、どういった感じを出そうと思っていましたか?	しみじみとした感じ		
③この絵にはどのような物語がありますか?	ほんやりと柿を 食べ、鐘の音を 聞いて		一人でいる しみじみとした感じ が身にまよっている
④作者はどのような心算を、この俳句に込めたのですか?	柿を食へる人 鐘と距離 近くはない		
⑤この絵の、見てもういたいところはどこですか?	どこかに座へる 人		言はせやしている は鐘が見えないから
⑥この絵の中で、離れてみえていないことは何ですか?			
⑦においや音、触感など、そのほかに感じたことはありますか?	清々しい 夕かきイメーシから 清々しい		

○交流を終えて、この授業の感想を書きましょう。

〈プリントB〉交流活動中に示した評価指標

俳句の観賞プリント③ () (部) () (年) ()
俳句に抱いたイメージを交流しよう

これから前回書いた絵を、観賞プリント②をもとに紹介します。紹介する相手は、同じ俳句を選んだ人です。

B (よい) をできるようにしましょう。よりよい交流になるために、A (たいへんよい) の項目を目指しましょう。できたら、活動のおわりに (○) をつけましょう。

①絵の説明【交流】 出席番号の早い方からどうぞ。

B 自分の「絵を描くときに想像したこと」を説明する。 () ()
B 「想像した理由」を俳句の表現から説明する。 () ()
A 「想像した理由」を、ことばの意味だけでなく、その響きや自分の経験から詳しく説明する。 () ()

②相違点の発見と交流について【比較】【分析】
説明が終わったら、絵を比べて見ます。同じ句なのに、「書いてあるものがちがう」。または、「同じもの書いても形や風景が違う」「作者がいるものといないものがある」でしょう。きっと、それぞれに理由があるはず。さあ、お互いに話し合い、なぜ自分がそう思ったのかを深めたり、班の人の意見を聞いて考え直したりしましょう。

B 皆や相手の考えた内容について「同じ」「違う」を見つめる。 () ()
B 「こんな風に思ったからこう描いた」と理由を伝える。 () ()
B 話し合いで、「なるほど」「そうかな」「私もそう思う」を伝える。 () ()
A 話し合いの中で、発言をまとめる。または相手のよい発言を促す質問をする。 () ()

③相違点の反映について【振り返り】
話し合いが終わったら、席に戻り、もう一度自分の想像したことと理由を見直しましょう。(プリント②《交流後の追加や気づき》欄)

B 「付け加えよう」「このままにしよう」「ここを変えよう」と考え直す。 () ()
B 考え直した内容が、俳句の表現にあっている。 () ()
A 考え直した理由を説明できる。 () ()
A 他の人の考えと自分の考えが違って、読みが深まった。 () ()

6 本時の振り返り

(1) 前時まで

初めに教科書記載の俳句を教材として基本事項、季語や切れ字などを学習した。その後、新たな句を提示し、作者の見た情景や心情を想像する学習を行った。教科書に掲載されている写実的な俳句については、まるでシャッターを切るように、世界を17音で切り取った文学であることから、想像した情景を絵に描き表す学習を行った。

(2) 本時

本時では、仮説「学習活動に応じた具体的な指標を作成・提示し、適切な時期に評価を行うことで、生徒は自ら考え、表現する力を身に付けるとともに、他者との交流を通して自らの考えを一層豊かにすることができる。」について主に検証した。

ア 「自ら考え、表現する力」を目指した発問と言語活動

プリントAを配布し、生徒は上段の〔項目〕に答えながら、前時に描いた絵を言葉に表した。生徒が前時に描いた絵のイメージを具体化し、表を書き込む過程を通して「自ら考える」活動を行った。

一定時間書き込んだ後、同じ俳句を選んだ者同士で班を作り、「表現する」交流活動を行った。交流活動では、生徒の「話したい」「伝えたい」意欲を促すに足る内容と、「交流して良かった」と感じられる結果となるような、広がりや深まりのある発問が必要である。ここでは、俳句を選ぶ行為によって生徒に主体性をもたせ、さらに情景を考えることで、他者に伝えたいと思うよう動機付けした。

イ 作成した「具体的な指標」を提示する時期と方法

本時では①絵の説明【交流】②相違点の発見と交流【比較】【分析】③相違点の反映【振り返り】という学習活動を設定し、プリントBを「学習活動に応じた具体的な指標」として生徒に交流活動の説明時に提示した。指標は、手順と目標を同時に提示する「フロー型」を採用している。言語活動の際、生徒が活動の流れ（フロー）を見ながら活動し、具体的なイメージをすることで、より「自ら考え、表現する力を身に付ける」という目標に迫りやすいと考えたためである。指標の内容は、受けもつ生徒の特徴や能力を考慮し、生徒のほとんどがB評価を達成できることを想定して作った。またA評価の項目を「目標」とし、意識して交流すれば、より課題に迫りやすい学習となるよう設定した。生徒が評価を気にしすぎて活発さを失うことがないように、C評価は記載せず、授業者の観察により対処することとした。

ウ 「他者との交流を通して自らの考えを一層豊かにすることができる」授業の構想

「他者との交流」により、生徒は他者【相違の検討】と自己【振り返り】の視点から評価される機会を得る。そのような言語活動の中でも、授業者が俯瞰^{ふかん}の視点をもって授業を行うことは最も重要である。授業者は、生徒には見られない、全体を見渡した学習活動の設定と評価を行い、個々の生徒の学習に迫る。

授業者は事前の教材研究や生徒の現状把握を行い、今回の学習に最もふさわしい活動を設定する。交流を必要とする活動が適している場合は、生徒の思考を予測し、多様で魅力ある内容と難易度の発問を設定する。その延長である評価指標においても、生徒の傾向や能力に応じて作り替える必要がある。また、豊かな活動のためには、生徒の的確な教材理解や本文

読解が前提となる。

以下プリントA、Bの評価指標を使用した結果を、観察とワークシートを基に分析した。

〈プリントA分析〉

- ① 生徒aは指導案展開1の時点で情景を具体的に表しており、交流活動でもよい話合いをしていた。その上で、《交流後の追加や気付き》は書き加えず空欄にしていた。
→その理由は、「3人のイメージが共通していたので変更点はありませんでした」と感想を書いており、自らの考えを「変更なし」と見直すことにも交流活動は機能した。
- ② 生徒bは《交流後の追加や気付き》において展開1の時点での内容から、4点を追加した。
→より具体的な空の様子や物語が追加されており、交流によって読み取りが豊かになったことがうかがえる。
- ③ 生徒cは、理解や言葉に表現することに時間がかかる。しかし感想欄では、「自分が分からなかったこととか、表現しにくいところが分かってきたのでよかったです。」と振り返っている。
→プリントの〔項目〕内容を全て考えてメモ書きに表現するのは、生徒の約半数にとって難しかった。選択制にすることもできたため、次回以降の課題とする。一方、交流活動において生徒が自らの表現力の「伸び」を実感した点にも着目したい。

〈交流活動観察・プリントB（指標）分析〉

- ① 一度の説明で手順を理解しかねた生徒が、プリントBを基に活動していた。一方、手順を口頭でのみ説明した他クラスでは、班員や授業者に聞きながら活動を行っていた。
→じっくり読んで理解したい生徒には、印刷物で示すフローが役立つ。特に、ねらいである「説明」「比較」を意識的に行っていた。一方、生徒が授業者の意図を汲み取ろうとするあまり、本来の目的から離れてしまう危険もある。また、活動が進むたびにプリントを読むため、時間がかかり円滑に進まない場合がある。印刷物を配らなかつた他クラスでは、研究対象クラスよりも速やかに作業が進み、「比較」をあまり意識できなかったものの、初めから堅苦しくならず、和やかな雰囲気があった。
- ② プリントB【振り返り】の指標では、プリントAの感想を記入することに意識が向いてしまい、自己評価を忘れる生徒もいた。逆にプリントAの感想を記入し忘れる生徒もいた。
→上記の自己評価は2枚のプリントで重複していた。また、プリントBの③の指標は必要なかった。評価指標として示すことが、学習活動の煩雑さや誘導につながることもあるため、示す内容と時機に気を付ける必要がある。
- ③ 生徒3人は同じ俳句を選んで交流活動を行ったが、1人は自分の思考を捉えて言葉で表現するのが難しい生徒であった。他の2人は指標②のA評価に準ずる態度で接し、3人共に有効な活動となった。
→交流活動という自他をすり合わせて認識し合う活動によって、生徒はそれぞれの役割を果たし、自然と自己有用感を得ている。より豊かな学習活動を促進していると考えられる。
- ④ 生徒dは、授業者の観察ではA評価に○はつかなかつた。しかし自己評価においてはA評価に○がついていた。

→大変真面目な生徒であるが、適切な自己評価ができなかった。評価指標を示す際には、生徒に判断しやすい言葉を用い、普段からの自己評価に慣れているかどうかも考慮すべきである。また、後に行った鑑賞文を書く活動の相互評価の際にも、生徒は「もっと良くするには」という視点の評価はできなかった。身になる自己評価、相互評価を行うには、目的と場面を絞り、計画的、継続的な指導と授業者の適切な理解が不可欠である。

7 検証授業後の学習

プリントAを基に俳句鑑賞文を書いた。鑑賞文は下書きに記述による相互評価を行い、清書した。下書きには主に共感と感心を寄せるコメントが記され、清書の際に書き手の役に立ったかは疑問が残る結果となった。下書きをうまく書けなかった生徒に相互評価と清書は有効であった。ただし1度目にも豊かな内容で書けていた生徒にとっては、繰り返しの作業となった。

(2) 実践事例2 (思考力・表現力・判断力等の「伸び」の認識)

教科名	国語	科目名	国語総合(古典)	学年	1
-----	----	-----	----------	----	---

1 単元(題材)名、使用教材

- ア 単元名 俳句表現の工夫について考えよう
- イ 使用教材 「奥の細道」

2 単元(題材)の指導目標

- ・俳句の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価しようとする姿勢を促し、書き手の意図を捉えようとする意欲を喚起する。(関心・意欲・態度)
- ・俳句の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価させるとともに、書き手の意図を捉えさせる。(読む能力 C(1)エ)
- ・言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について気付き、伝統的な言語文化への興味・関心を広げさせる。
(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項 (1)ア(ア))

3 単元の評価規準

ア 関心・意欲・態度	エ 読むこと	オ 知識・理解
作者の表現の工夫や意図を捉えようとしている。 課題について自分の言葉で表現しようとしている。	作者の表現の工夫や意図を捉えている。 課題について自分の言葉で表現している。	俳句の句法を理解している。

4 単元（題材）の指導と評価の計画（2時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点			評価規準 (評価方法など)
		関	読	知	
第一次	<ul style="list-style-type: none"> ・「奥の細道」立石寺を音読する。 ・俳句の句法について学ぶ。 ・「閑さや」の句について、浮かぶ情景、作者の感動、疑問点を書く。 	●		●	<ul style="list-style-type: none"> ・進んで音読しようとしている。ア〔観察〕 ・俳句の句法を理解している。オ〔定期考査〕 ・自分の言葉で表現している。エ〔ワークシート〕
第二次	<ul style="list-style-type: none"> ・他の生徒の記述した考えや疑問を読む。 ・「閑さや」と初案「山寺や」とを比較し、表現の違い、作者の工夫などについて考える。 ・自分の意見を、理由を示しながら説明し、他者と発表し合う。 ・鑑賞文を書く。 	●	●	●	<ul style="list-style-type: none"> ・進んで読もうとしている。ア〔観察〕 ・自分の言葉で表現している。エ〔ワークシート〕 ・他の生徒の説明を聞くことができる。エ〔観察・ワークシート〕 ・自他の考えを比較して自分の考えに反映している。
	<ul style="list-style-type: none"> ・評価を通して、自己の力の伸びと課題を把握する。 	●			<ul style="list-style-type: none"> エ〔ワークシート〕 ・自己の力を適切に把握している。

5 本活動（第二次後半部）

(1) 目標

- ・評価を見て、自己の力の伸びを認識する。
- ・評価を見て、自己の課題を把握する。

(2) 学習活動、留意点等

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法 (ア～エ)
まとめ	10分	・評価を見て、自己の力の伸びと課題を把握する。	・生徒自身が伸びと課題を把握できるように評価指標を工夫する。	・自己の力を適切に把握している。

6 本活動の振り返り

(1) 学習活動について

ア 前活動まで

実践事例1では、学習活動の最中に複数回、評価指標を示すとともに、自己評価の機会を設けた結果、スムーズな学習活動を妨げるおそれがあるという課題が発見された。それを受

け、実践事例2では、学習活動を始める前に評価指標を提示し、学習活動の終わりに、アンケートの形で自己評価をさせた。

第一次として、「閑さや」の俳句について、俳句から浮かぶ情景・イメージ（見えるもの・聞こえるもの・感じること）、疑問点、芭蕉は何に感動したのか、について記述させた（課題一）。第二次では、指標を提示し、初案「山寺や」との比較について、交流を含む学習活動をさせた。一旦活動を終了させた後、授業者は評価シートへのコメント記載に加え、ワークシート最終課題の鑑賞文について、以下の2点について記述による評価を行った。①良いところに波線を引き、◎をつける（複数あれば、全て）。②「ここに気を付ければ、さらに良い文章になる」ポイントを1点コメントする。生徒が書いていない着眼点を与える、抽象的な言い方を詳しく言葉にするよう求める、個別に記されている事柄について合わせて考えることを促す等の視点からコメントを付した。

国語総合 閑さや 年 <input type="text"/> 組 <input type="text"/> 番 <input type="text"/> 氏名 <input type="text"/>	
課題二 初案と完成句の言葉について、それぞれ、イメージされることを書こう。また、どちらの言葉がふさわしいか、それはなぜか、考えてみよう。	
◎ 「山寺や」と「閑さや」	
◎ 「石にしみつく」と「井にしみ入る」	句全体・芭蕉の感動
課題三 同級生の意見を聞き取り、右の欄にメモしよう。気づいたことも書き加えよう。	
課題四 メモのうち、説得力のある意見を選び、右の空欄に◎をつけよう。	
課題五 俳句「閑さや」について、情景や作者の感動（心の動き）、表現の工夫（言葉の選び方）などについてふれながら、鑑賞文を書いてみよう。	
① グループ活動の中で、新しい発見があったか、(あった・なかった・わからぬ)	
② 「付け加えよう」「このままにしよう」「ここを変えよう」と考え直せたか、(できた・できなかった)	
③ 他の人の考えと自分の考えが違って読みが深まったか、(深まった・深まらなかった・わからない)	
④ グループ活動について、あてはまるものに○をしよう(いくつでも)。友人の意見で発見があったら、友人の意見に質問することができた。友人の意見が理解できなかった。	

< ワークシート >

次回の目標	今回がんばったこと・できるようになったこと	評価項目	評価の対象	評価指標	年	組	番	氏名	
		自分の考えを 持っている	課題一・課題二						A
		同級生の意見 を聞ける	課題三・(ア) ④						B
		他者の意見を 比較検討でき る	課題四・(ア) ①②						C
比較の結果を 自己の表現に 生かせる	④ 課題五・(ア) ③	すべてについ て記入でき ている	ひとつでも記 入できている	全く記入でき ていない	評価				

〈 評価指標シート 〉

イ 本活動（第2次後半部）

ワークシートと評価指標シートとを返却し、「今回がんばったこと・できるようになったこと」及び「次回の目標」について、生徒に記入させた。その際、評価シートについて、目標の「B」は、多くの生徒が達成できていたと伝えた。また、評価4について、各人の最初の文章（課題一）と最後の鑑賞文（課題五）とを比較したもので、他人との比較ではなく、各生徒の「伸び」の評価を示していると説明した。学習のまとめとして、課題一・課題五（抜粋）の記述2クラス全員分を一覧にしたプリントを配布した。

(2) 評価結果とアンケート結果の相関

表1は、授業者の評価シートによる評価結果、表2～4は評価と生徒の意識(アンケートによる自己評価)との相関である。

表1 評価シートによる評価結果

	A	B	C
評価1	24	4	1
評価2	23	6	0
評価3	17	8	4
評価4	6	21	0

表2 評価2とアンケート①との相関

評価2	あった	なかった
A	16	7
B	4	2

表3 評価3とアンケート②との相関

評価3	できた	できなかった	無回答
A	12	4	
B	6	1	1
C	2	3	

表4 評価4とアンケート③との相関

評価4	深まった	深まらず	分からない	無回答
A	4	0	2	0
B	13	2	5	1

表5 評価3とアンケート④との相関

評価3	なるほど	発見	自信	質問	理解できず	分からない	無回答
A	5	8	3	1	1	0	1
B	3	4	2	0	0	2	1
C	1	1	0	0	1	1	0

表2から、同級生の意見をメモできていても「発見がない」場合が確認できる。「同じようなことを思っている気がする」という感想をもつ生徒が該当すると思われる。自己の意見を肯定する方向につながれば良いが、他方、「他の人があまり意見を書いていなかったので、自分の意見に似ているものしか出なかったのが残念」という感想もあった。「発見があった」とする生徒は「人それぞれイメージするものは違う」「似ているところと違うところがあったのが面白かった」「みんなの考えが分かって良かった」と記していた。

表3では「できなかった」と自己評価した生徒5人に、授業者が「A」あるいは「B」評価を示したことで「できている」と伝えられた。反対に「C」評価のうち2名が、自己評価では「できた」としている点について、指導を行う必要のあることが分かった。

表4、表5については「分からない」と答えた生徒が、自己判断できていないことが伺える。特に表4について、発見を鑑賞文に生かされていなくていいという意識の表れとも読み取れる。生徒は何によって「深まった」と判断するのかという点についても追跡する必要がある。

(3) 評価シートの生徒の記述

本活動で記入させた評価指標シートの生徒記述を抜粋する。「伸び」を示す「今回がんばったこと・できるようになったこと」については、「他人の意見を聞いて自分の意見と比較して考えられるようになった」「俳句について深く考えることで、俳句についての見方が変わった」「文章を読み情景が浮かぶようになった」などと記述していた。

「課題」を示す「次回の目標」については、「『例えば』をきちんと書けるようにしたい」「他

人の意見に耳を傾けること」「言葉の使い方に気を付ける」「イメージを広げること。変化に気付き、自分の考えを広げること」「もっと想像をふくらませて一つの句についてたくさん気付けるようにしたい」などと掲げていた。それぞれの生徒が、今回の活動における自己の力の「伸び」と、次の学習活動に向けた「目標」とを、自分の言葉でしっかり記入していた。

(4) 「伸び」の評価指標の分析

今回の指標は、三つ(評価1～3)が量的なもの、一つ(評価4)が質的なものになっている。PISA調査で空欄の多さが指摘されているが、本校生徒も例外でなく、記述について空欄が目立つ。まず、空欄を無くすことを目標とし、意欲的に取り組もうとする「興味・関心・態度」を反映する指標を設けた。評価結果を見ると、量的な指標については、おおむね「B」以上で、目標を達成していた。「伸び」を反映する質的な指標の評価結果についても同様だが、「A」と「B」の比率が逆転している(2名は白紙を含み判定不能)。課題二・三で、多角的な視点から意見をメモできていながら、鑑賞文に反映されていないため、「B」評価となった生徒が複数いた。

今回の指標では、中位の生徒について「伸び」を確認できた。「A」評価を受けた成績中位の生徒は、その後、授業態度の改善が見られた。また、アンケート以外を白紙で提出し、評価1～3で「C」評価の生徒(試験の点数は良く、記述を全く書かないわけではない。グループ活動中、聞いたらメモするよう声を掛けたが、白紙で提出)が、検証授業に続いて行った漢文の授業以降、積極的な参加姿勢を継続している点も、評価が肯定的に働いた証と言えよう。

(5) 「評価指標シート」に対する生徒感想の分析と課題

後日、評価指標シートに関して生徒に感想を求めた。肯定的に捉えたものとして、「自分の評価を自分で判断でき、なおかつ、その後の自分の目標を立てることができるため、とても良い」「言葉にするのが苦手だけど、このやり方をしていることがどんどん出てきて良い」「真面目にやれば良い評価をもらえると分かった」「どのくらいやれば良いか分かった」「評価シートはあって良いと思う。結果を見て、もっと頑張ろうと思った人もいると思うし、自信を持てる人もいると思う」「先生の意見が個別に分かったので良かった」が挙げられる。

逆に、「結構きちんと書いてA三つとB一つだった。でも、適当なことしか書いていなかった同級生が同じ評価だったのには若干の疑問があった」という意見もあり、各人の文章を比較した、自身の能力の「伸び」に関する指標だという意識を定着させる必要がある。

さらに、「最後の評価はよく分からなかった。考えの「伸び」と言われても、元々の考えを低くして考えなければいけないのかと思ってしまう」と疑問視する見方から、指標の改善点が伺える。考査成績が中位・下位の生徒については「伸びしろ」が大きく、有効に働く一方で、成績上位者については、「伸びしろ」が少ない。今回、「伸びしろ」の幅を考慮せず、同じ尺度で測り、ワークシート記入から「もっと書けるはず」と判断し、「B」評価とした。授業者側の「さらに伸びてほしい」という期待も込めた評価だが、「B」が目標だと伝えても、さらに上の評価があれば、最高の評価を受けたいと願うものであり、成績上位者ほど「A」で当然という思いもあろう。「Aが二つもあってうれしかったけれど、Aがなかったら評価指標はいらないと思うと思います」「Bが一つあったので次はオールAを取りたい」という感想も、生徒が「A」を目指していることを示している。

つまり、成績上位者については、小さな変化を「伸びしろ」として捉える視点により評価を行うことが肝要だと気付かされた。加えて、能力の異なる生徒を一つの評価指標で測ろうとする場合、指標の提示の仕方が難しい。具体的な内容にすると、上位の生徒の能力を押さえ込んでしまうおそれがある。自由な思考を妨げないような、さらにその力を伸ばせるような、抽象的な指標を示し、意欲を削がないことも今後の重要な課題だと考えている。

総じて、「伸び」を生徒に自覚させる評価指標は有効である。「伸びしろ」の多い成績中位・下位者について、まず「取組」を評価する項目を用意し、「A」評価により、関心・意欲・態度を育てた上で、質の向上へと導くことができる。他方、能力のある成績上位の生徒については小さな変化を見逃さず、その変化に肯定的な評価を示しつつ、より質の高い文章を書くためのポイントを見極めて伝え、少しずつ能力を引き上げていくことが必要となろう。

「育む」という視点で「評価」の活用を考える場合、「ほめる」ことの重要性を忘れてはならない。生徒が「評価」に慣れ、「もっと伸びたい」というサインを出すまで、焦らないことも大切ではないか。即効性の「伸び」を希求することは、関心意欲を削ぎ、能力の芽を摘む危険性がある。一つの評価指標によって測れる「伸び」は、生徒のもつ能力のわずかな部分であり、今後、様々な能力の「伸び」を促す評価指標を工夫していくことが大切である。

(3) 実践事例3

教科名	国語	科目名	国語総合（古典）	学年	1
-----	----	-----	----------	----	---

1 単元（教材）名、使用教材

- ア 単元名 随筆の楽しみ
- イ 使用教材 枕草子 にくきもの

2 単元（題材）の指導目標

- ・ 文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わおうとしている。
（関心・意欲・態度）
- ・ 文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わっている。
（C読むこと（1）ウ）
- ・ 歴史的仮名遣いのきまりや古典単語の意味などを理解する。
（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項（1）ア（イ））

3 単元の評価規準

ア 関心・意欲・態度	エ 読む能力	オ 知識・理解
文章に描かれた人物、情景、心情などを理解しようとしている。 表現に即して内容を読み取り、自分のものの見方、感じ方、考え方を豊かにしようとしている。	文章に描かれた人物・情景・心情などを表現に即して読み味わっている。	歴史的仮名遣いの読み方を理解している。 古典単語の意味を理解している。

4 単元（題材）の指導と評価の計画

時間	学習活動	評価の観点			評価規準 (評価方法など)
		関	読	知	
第一次	<ul style="list-style-type: none"> 枕草子の成立について理解する。 本文を音読し、歴史的仮名遣いの読み方を理解する。 	●		●	<ul style="list-style-type: none"> 枕草子の成立について理解している。アオ[ワークシート] 音読をし、歴史的仮名遣いの読み方を理解している。アオ[観察]
第二次	<ul style="list-style-type: none"> 古典単語の意味を理解し、本文を現代語訳し、筆者の挙げる「にくきもの」の内容を理解する。 筆者の感性について考え、共感する点を挙げる。 	●	●	●	<ul style="list-style-type: none"> 古典単語の意味を理解し、現代語訳を完成させている。アエオ[ワークシート] 「にくきもの」の内容を理解している。エ[ワークシート] 筆者の考えと自らの考えを比較し共感する点を挙げることができる。アエ[ワークシート]
第三次	<ul style="list-style-type: none"> 自分の考える「にくきもの」を挙げ、グループで意見交換をする。 グループで話し合い最も共感の高かった「にくきもの」を発表する。 	●	●		<ul style="list-style-type: none"> 自分の考える「にくきもの」を挙げるができる。アエ[ワークシート] 他者の「にくきもの」を読み、感想を深めることができる。エ[観察・ワークシート]
第四次 (本時)	<ul style="list-style-type: none"> 評価結果から自己の学習を振り返り、自己の力の「伸び」と「課題」を把握する。 	●			<ul style="list-style-type: none"> 評価結果から自己の力を把握し、「伸び」と「課題」を把握することができる。ア[ワークシート]

5 本時（全5時間中の5時間目）

(1) 本時の目標

- 自己の学習を振り返り、評価結果から自己の「伸び」と「課題」を把握することにより、表現に即して内容を読み取り、自分のものの見方、感じ方、考え方を豊かにしようとする。
- 自己の力を捉え、目標を立てる。

(2) 本時の展開

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入	10分	<ul style="list-style-type: none">単元の目当てと学習活動を振り返る。学習活動を把握する。	<ul style="list-style-type: none">これまでの使用したワークシートを返却し、目当てを振り返らせる。	
展開	25分	<ul style="list-style-type: none">観点別の評価結果から自己の伸びと課題を把握する。評価指標から次の学習への目標を設定する。	<ul style="list-style-type: none">生徒自身が伸びと課題を把握できるよう評価指標を工夫する。	ワークシート・観察 (ア)
まとめ	10分	<ul style="list-style-type: none">ワークシートを提出する。次回の学習への見通しをたてる。	<ul style="list-style-type: none">次回の学習へつながりをもつよう促す。	

6 本時の振り返り

(1) 前時まで

本実践事例は夜間定時制普通科高校におけるものである。生徒の特徴として、基礎学力に課題があり、学習意欲も低い生徒が多い。また、他者とのコミュニケーションが不得手でグループ学習や発表を苦手とする傾向が強い。

本単元においては知識として覚えるべき古典単語を厳選し、現代語訳しやすいうワークシートを工夫し、本文に書かれている内容の理解を単元の前半の目標とした。単元の後半では内容の理解を基に、自分の考えと本文とを比較し、「共感」を糸口として「自分の考えをもつこと」や「自分の考えを他者に伝えること」さらに「他者との交流の中から考えを深めること」を目標に掲げ学習活動を行った。

(2) 本時

本時では評価結果を基に自己の力の「伸び」と「課題」を把握し、次の学習への目標を設定するという学習を行った。

ア 評価項目の提示時期の工夫

実践事例1、実践事例2では活動の流れが分かるように評価指標を適宜ワークシートに載せた。生徒が活動の流れを把握し、目標の達成に迫りやすいという検証効果をもたせつつ、生徒が容易に自己の学習の振り返りを行えるようにするために、あらかじめ単元の学習計画に沿った自己評価型の評価一覧を作成し、単元の学習を進めた。生徒が授業ごとに目標の確認と振り返りができるように工夫することで、回を重ねるたびに、授業態度・学習意欲の向上が見られた。

本時は、この評価一覧に対応した評価結果項目を立て、評価結果とともに生徒に提示し、自己の学習を振り返って「伸び」と「課題」を把握させる学習を行った。

	チェック項目	達成度	授業内容の共有・感想・反省
1	<ul style="list-style-type: none"> ・漢字・数式・羅字は取り組んだ ・本文を表現することができた ・古典単語の意味を理解した ・単語の意味を訳にあてはめることができた 	A B C A B C A B C A B C	
2	<ul style="list-style-type: none"> ・漢字・数式・羅字は取り組んだ ・古典単語の意味を理解した ・単語の意味を訳にあてはめることができた ・本文の単行本「にくきもの」の内容を理解した 	A B C A B C A B C A B C	
3	<ul style="list-style-type: none"> ・漢字・数式・羅字は取り組んだ ・「にくきもの」について考え共感する点をおけることができた ・筆者の感性・感覚について考えることができた 	A B C A B C A B C	
4	<ul style="list-style-type: none"> ・漢字・数式・羅字は取り組んだ ・自分の中の「にくきもの」をおけることができた ・自分と他の人の「にくきもの」を比べ感想をもつことができた 	A B C A B C A B C	

イ 評価指標の工夫

実践事例1、2では、評価指標・評価結果を提示し、自己の力を把握させる学習の中で、「授業者による評価」と「生徒の自己評価」がずれているケースが見られた。授業者が提示した評価指標が適切でない場合と、生徒の自己評価が適切でない場合の二つの原因が考えられる。生徒の現状に応じて、理解しやすい評価指標、根拠の明確な評価結果を目指す必要がある。また、実践事例2では具体的な指標により、上位の生徒の能力を抑えてしまうという課題があった。実践事例3では、授業ごとに確認する評価一覧と対応させることで生徒が振り返りやすいルーブリックを作成した。評価指標ではBを標準とし、Sを加え、上位の生徒への対応を図った。

ウ 目標作成への手だての提示

評価指標を作成し評価結果を伝えても、生徒が「自己の力を伸ばすためにどうすればよいか」を考えられるとは限らない。提示された評価指標を比較・検討し、自己の伸ばすべき能力を導き出せる場合はよいが、そうでない場合には生徒の課題解決能力に応じて、次の学習への目標作成への手だてを示す必要がある。

実践事例3では、評価結果に加え目標作成への手だてを示し、生徒が次の学習への目標をたてやすいように工夫を試みた。生徒の単元の学習状況から授業者がS・A・B・Cの当てはまるものにチェックを入れ評価結果として生徒に提示した。生徒は評価結果、指標を基に単元の学習を振り返り、自らの「伸び」「課題」について考え、目標を作成する。本実践では生徒の状況を鑑み、目標作成への手だてを合わせて提示した。

「伸び」の実感がうかがえる生徒記述

【学習の振り返り欄】

- ・清少納言を含め、他人の意見と自分の意見を比べ、共通点やどこが違うかなどを比べた。
- ・考えて探して、理解することを頑張った。
- ・にくきもの訳を自分なりに考えた。自分の考えが班の代表作になった。みんなの前で発表した。
- ・自分の中の「にくきもの」を自分なりに分かりやすく相手に伝えるように言葉にするのを頑張った。

- ・意識したのは他の人の「にくきもの」を理解すること。

【次の学習の目標欄】

- ・よく読んで筆者の考えや伝えたいことを考える。
- ・分からなかったら「あきらめる」ではなくて、考えて、探して、をなるべく行う。
- ・表現することと考えることを怠らないようにします。
- ・自分の意見を持ち、発言できるようになる。
- ・自分の考えを理解してもらえないとき、相手が何を理解できていないかを自分も理解して相手に理解させる。

ワークシートでは上記のような記述が見られた。授業ごとに振り返りを行ったことにより、生徒が「伸び」を実感し、その結果、前向きな目標を立てることができたと考える。

一方で、指標の内容ではなく、A・B・Cのいずれであるかのみに注目し「Aになるように頑張る」「授業をしっかりと受ける」などといった、指標や手だてが反映されていない目標も見られた。「評価」にとらわれすぎてしまっている生徒、手だてを頼りに目標を考えることができない生徒には個別に指導・助言が必要である。

「にくきもの」振り返りシート

年 組 番 氏名

	チェックポイント				Aへの道のり (目標のヒント)
	S	A	B	C	
態度	授業で何を学ぶのかを意図し、自ら目標を設定して意欲的に取り組んでいる	おしやべり・質問・飲食をせず、授業で何を学ぶのかを意図して取り組んだ	おしやべり・質問・飲食をせず授業に取り組んだ	おしやべり・質問・飲食など授業に関係のないことをしている時がある	授業に関係のないことをしないことはもちろん「今日の授業では何を学ぶのか」を意識して臨むことが大切
読む	古典単語の意味を理解し訳文を完成させ、内容と筆者の感情について理解し、そこからおもしろさを見出している	古典単語の意味を理解し訳文を完成させ、内容と筆者の感情について理解することができた	古典単語の意味を理解し訳文を完成させ、内容を理解することができた	説明を聞いておらず訳ができていない	書いてあることはもちろん、書いた人の感性・考え方にも注目してみよう
考える	自分の中の「にくきもの」を挙げ、他者と意見交換を行い、自分の考えを広げるために他者の意見を聞くことができた	自分の中の「にくきもの」を挙げ、他者と意見交換を行うことで、自分の考えを広げることができた	自分の中の「にくきもの」を挙げ、他者と意見交換を行うことができた	自分の中の「にくきもの」を挙げることができなかった 他の人と意見交換することができなかった	他の人と意見交換を行うことで自分の考えを広げたい。感想を深めることができると良い
表現する	書かれていることや筆者の考え方を読み取った感想を表現できている	書かれていることや筆者の考え方に対する感想を「なに、なぜ、どのように」を明確にして表現した	書かれていることや筆者の考え方に対する感想を感想文やプリントに表現した	感想文やプリントに自分が考えたことを表現することができなかった	「何に列し、なぜ、どう思ったのか」を授業中にわかるように書くようにしよう

「にくきもの」を通して、自分の中で意識して取り組んだこと・頑張ったこと・できるようになったことを文章でまとめてみよう

にくきものをよく読んで、よく共感できました。また、いろいろな考えが、他の班の発表もそのすばい共感できました。自分の考えににくきものを広げ、自分自身で考えた。

次回の目標(引き続き頑張ること・伸ばしていくこと)

くり返し「態度をきまろう!!」
自分で読んだ筆者の考えや、伝えたい事を考えよう。
よくと漢字!!!

VI 研究の成果

本研究は、国語総合（現代文・古典）の授業において、評価の指標とこれに基づく評価結果を介して、生徒が課題を把握し、思考力・判断力・表現力等の伸びを実感していく過程を、授業実践を通して分析し実証することを試みたものである。

研究仮説の設定では、新しい学習指導要領で重要視されている学習評価の現状について再検討した。指導と評価の一体化が課題となつて久しいが、その現状は未だ「ペーパーテストを中心としていわゆる平常点を加味した、成績付けのための評価にとどまっている」(文部科学省「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」平成22年)とある。各研究員は、所属校での実

感を基に、評価結果を学習活動に生かす必要性を提起し、そのための具体的な方策を提唱した。

実践事例1では、国語総合現代文分野として、俳句への鑑賞文を用い、「書くこと」の領域を中心として、自己評価・相互評価活動を行い、思考力・表現力の変容を検証した。授業者は、教材に配列されている句は対象が明示されており、絵画的表現性の高さに着目し、生徒が着想したイメージをいったん絵に描かせることで、抽象化・記号化された作品の主題を読み取らせた。その過程において自己評価・相互評価を行わせ、授業者による評価結果も明示したことで、作品の理解に加え、現在の学力の把握に評価指標が役立つことが生徒の記述から実証された。一方で、評価結果から課題を読み取らせる点については不十分であったため、評価場面・評価項目の整理の必要性を指摘し、実践事例2での解明の方向を定めた。

実践事例2では、国語総合古典分野として、「奥の細道」の俳句を用い、「読むこと」の領域を中心として、自己の意見を交流活動により深めた上で鑑賞文を書き、自己評価を行うことにより、思考力・判断力・表現力等の伸びと課題の把握について検証した。授業者は、作品の主題を学習させるなかで、実践事例1での指摘を受けて評価指標の目的と場面を絞り込み、授業の活性化を試みた。評価結果とアンケート結果の相関関係を分析し、特に成績中位・下位層への有効性を実証した。

実践事例3では、国語総合古典分野として、随筆を用い、「読むこと」の領域を中心として、成績上位層にも有効な評価指標を作成した。評価結果に加え、次の学習への目標作成のための具体的な手だてを、生徒に合わせた内容を毎時間提示することで、生徒は自己の学習課題を把握し、学力の伸びを実感できることを実証した。

本研究では、学習評価を念頭に置いて授業実践を行った。「評定を出すための評価」に定位しがちであった従来の授業研究に対し、新たな可能性を開いている。ワークシートや発言の分析からは仮説が実証され、また、評価指標の開発自体が、授業者の評価能力の開発につながるため、実践に役立つ研究であるといえる。比較分析したデータの分量が少ないという問題点は有するものの、臨地研究は「個別事例の観察であることから、全体を把握するという観点からは、サンプル数についての量的な制約や、観察範囲の限界がある」（文部科学省「人文学及び社会科学の振興について（報告）」平成21年）こともあり、本研究は今後の学習評価の在り方の一方向を指針したものと考えられる。

Ⅶ 今後の課題

1 計画的な授業構想

本研究では、「はじめに教材ありき」ではなく、生徒に身に付けさせたい目標と、目標に準拠した評価から授業を構想した。そして、これに基づき、生徒に身に付けさせたい能力、そのための学習評価を念頭に、生徒の自己評価活動、相互評価活動などを取り入れ授業実践を行った。これに際しては以下の2点に留意することが必要であり、それは本研究の課題でもある。

(1) 生徒理解・教材開発

授業者は現時点での生徒の思考力・判断力・表現力等の状況、生徒による評価活動への意

識や習熟がどの程度か、授業実践による到達度や今後の伸びしろの想定、有効な発問、学習活動や手だて等の様々な想定を行うことになる。今後、従来よりも広く深い生徒理解・教材開発能力が必要となってくると考えられる。

(2) 適切な評価計画

授業者による評価や評価活動のタイミング、評価指標の提示の仕方によって、評価指標の有効性が変わってくる。例えば、生徒に提示する評価指標に具体的な数値を交えるか、文言のみかによって、生徒の評価活動を煩雑にしたり、逆に評価のぶれを生じさせたり、時に評価指標が生徒の思考の妨げとなることもあり得る。これらの課題に関しては、今後も研究していく必要がある。評価計画や評価指標の作成と運用については、授業実践1、2、3において用いたフロー型、プリント型、毎時の評価項目とそれを総括するルーブリック型による評価指標のそれぞれは、従来授業者が行ってきた口頭、プリント、板書による発問や指示、設問、授業の目当ての提示等に基づくものであり、既に各授業者が行っているものである。授業の目当て及び見通しを、授業者と生徒とが共有することで学習活動が円滑になること、また、生徒自身が考えの深まりや「伸び」を実感できることを、本研究は検証し確認した。各授業者が今後、積極的に評価計画を立て、有効な事例を挙げていくことが、今後の教育の発展につながるの間違いはない。

また、本研究では取り上げていないが、授業ごとや単元ごとにとどまらず、評価指標を授業者と生徒間で共有するために用いたプリントを集積し、ポートフォリオ化するような評価方法もある。これにより、生徒に学習活動を長期的な視野で振り返らせ、学習の継続性をつかませ、「伸び」を改めて実感させることが可能となる。授業者はポートフォリオ化したものから、自身の授業構想を振り返るとともに、今後の授業構想の手掛かりを得ることができる。適切な生徒理解や教材開発に基づき、授業者が全体を俯瞰した適切な評価計画を作成することは、学習観やメタ認知能力等への働きかけをも見据えた新たな授業構想の可能性を切り拓くものである。そのような新たな授業構想の在り方の研究も今後必要になるといえよう。

2 国語科の果たす役割

平成25年12月に公表されたPISAの結果では、読解力の回復傾向がみられた一方で、論述式の間における無答率がOECD平均より高く、課題となった。この課題に対しては、作文だけでなく、レポートや観察記録等の多様な学習活動に取り組むことが必要である。

この4月より実施された新しい学習指導要領における、国語科の果たす役割と責任は大きい。全ての教科・科目、総合的な学習の時間において言語活動の充実が求められているが、国語の力は、それら全てに通じる基礎的な力である。また、更なる学習を積み上げていくための土台となるものでもある。授業で学んだことがその場限りの学習で終わるのではなく、学びたいという学習意欲をもたせ続けることが、あらゆる教科・科目に対して主体的、継続的に取り組む動機付けにもなる。そのためには、今回の研究を一助として、国語科における言語活動を他教科に向けて積極的に発信するとともに、他教科における言語活動について情報収集に努め、それらに関連付けるための中核的役割を担うことが期待されている。

平成25年度 教育研究員名簿

高等学校・国語

学校名	課程	職名	氏名
都立小石川中等教育学校	全日制	教諭	◎永井 充
都立葛飾商業高等学校	全日制	主任教諭	床 篤志
都立江北高等学校	定時制	教諭	金子 藍子
都立浅草高等学校	定時制	教諭	山際 咲清香
都立大島高等学校	全日制	教諭	新垣 智史
都立大泉桜高等学校	全日制	教諭	島村 遷
都立稔ヶ丘高等学校	定時制	教諭	竹添 あゆみ

◎ 世話人

[担当] 東京都教育庁指導部高等学校教育指導課

指導主事 佐藤 幸司

平成25年度
教育研究員研究報告書

高等学校・国語

東京都教育委員会印刷物登録

平成25年度第193号

平成26年 3月

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課
所在地 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
電話番号 (03) 5320-6836
印刷会社 昭和商事株式会社